

## 創 刊 の 辞

この研究紀要は、1990年4月、創設された国際教養科のスタッフによる業績を収め、ひろく、わが国のみならず、諸外国の同学の士に、その成果を示し、忌憚のない御批判を乞うために発刊されるものである。

わが国が、閉鎖的な島国として長い間、アジアの一隅に存在しつづけた時代は、完全に過ぎ去った。敗戦後46年の間、日本国民が営々たる努力と研鑽の結果、享受している経済的繁栄を、いかにして、資源提供と労働力の面で支えつづけてきた発展途上国に還元するかが問われている。また、主要先進国間の協調と繁栄をめざすため、文化摩擦、経済摩擦などのあらゆる新しく生起した矛盾を平和的に解決しうるかが、わが国に問われているのである。

国際教養科創設の目的が、急激にすすむ国際関係のなかで、しっかりと世界の趨勢をつかみ、日本の世界に対する貢献のなかで、わが国も世界も共に繁栄する方途を自力で考えうる青年を養成することにあることは、改めて言うまでもない。しかし、この事は、言うは易く、行なうは難き事業である。学問が日月進歩しているのみならず、さらに新しい学際的学問に正面から取りくむという至難の知的営為が、国際教養科に属する諸教師の双肩にかかっている課題だと言ってもよいであろう。新しい酒は、新しい甕に盛られなければならない、その新しい酒は、古い酒の長所を十分に摂取したうえで、つくられなければならないのである。

およそ、このような知的状況は、日本の歴史はじまって以来の出来事であるといわなければならない。英語をはじめ、多くの外国語を自家薬籠中のものにしながら、それを武器として、わが国及び諸外国の先進的研究を摂取することによってのみ、学際的研究は、大きく進歩すること

ができる。

同時に、二年間という短い期間に、いかにして、この新しい国際教養を、体系的に教えることができるかという大問題も、我われの眼前に立ちだかっている。

わが国際教養科は、今年4月ふたたび新1年生をむかえ、一つの完全な学科としての体裁をととのえることができたが、問題は、今後に残されているとあってよい。教育と研究の両立が、各教師の自覚と精進によって十分可能であると外にむかって示しうるのは、まだ数年を要することであろう。

この学術紀要が、単に、本学で教鞭をとる教師にとどまらず、諸大学の同学の士に、何らかの知的刺激を与えることになれば、望外の幸せといわなければならない。そして、そのような注目を浴びる紀要でありつづけるために、国際教養科の教師一同が、たえまなく研究への姿勢を維持し、研究と教育の一元化に努力しつづける必要がある。

その意味で、この学術紀要の創刊号は、千葉県佐倉市の一角から、全日本、否、全世界の同学の士に対する知的挑戦状といってもよいであろう。

ねがわくは、多くの学友が、この創刊号を手にし、熟読し、きびしい御批評をいただきたいものである。

従来、学術紀要は、一般学術雑誌より一段下と考えられてきた。この紀要は、いつの日にか、このようなタブーを破るべき存在となりたいとのひそやかな願望をもって発刊されたものである。千葉敬愛短大の「国際教養学論集」に注目し、期待していただきたいと望んでいるのは、ひとり、私のみならず、国際教養科の教師一同の共通の願望であることを確信し、創刊の言葉とする。

1991年6月17日

学 長 菊 地 昌 典